

陳浚介『白話文文法綱要』に関する一考察 —品詞とその範疇を中心に—

田村 新

A Consideration of CHEN Junjie (陳浚介) “*Baihuawen wenfa gangyao* (白話文文法綱要)”

TAMURA Arata

摘要

1920年出版の陳浚介《白話文文法綱要》は記述白話文の語法書。一般来说这一时期研究语法的倾向是模仿西洋语法，但田村2009指出陳浚介有可能受日语语法影响。本文先简述未被先行研究提及的此书内容，再以词类、其下位分类法和品词范畴为线索对照此书、“初期白話文法群”、大槻文彦、納氏文法等相关记述，考察该书是否导入日语语法，藉以评价该书。考察结果是本文确认代词里有类似日语敬语的概念以及陳浚介的助动词分类很像日语助动词分类。这些事实可表明陳浚介接受了日语语法的研究成果。笔者还认为陳浚介运用了英语的代词、形容词、副词的词类分类法。本文认为陳浚介不是生硬地运用日语和英语语法，而是在把握中文特征基础上运用的。通过这些事实，本文评价该书是了解“初期白話文法群”研究水平时很重要的一部语法著作。

キーワード：品詞 品詞の下位分類 範疇 「初期白話文法群」

0. はじめに

中華民国^[1]初期の1910年後半頃よりいわゆる言文一致運動が起こった。この運動以前の文章は書き言葉である文言で書かれていたが、言文一致運動が起こると話しことばに近い言語で書かれるようになる。本稿ではこのような文を「白話文」と呼ぶことにする。1920年になると白話文を記述した文法書が出版され始める。1924年に黎錦熙の『新著国語文法』が出版されるまでの間に、10数冊の白話文を記述した文法書が出版された。本稿ではこの時期に出版された文法書を「初期白話文法群」と呼ぶ

こととする。この「初期白話文法群」を含む清末民初の文法研究の特徴について、龔千炎 1997 は「西洋文法の受容にある」（龔千炎 1997：3）と述べている。この「初期白話文法群」のなかの一冊に 1920 年 8 月に商務印書館より出版された陳浚介『白話文文法綱要』（以下本書と略称する）がある。本書についてもっばらに取り上げた先行研究は管見の限り見当たらない。かつて筆者は「初期白話文法群」の品詞の名称と量詞ならびに助動詞について論じた。そのなかで本書について「日本語学の成果を取り入れた可能性が窺われる」（田村 2009：16）と指摘した。本稿はこれまで先行研究が取り上げてこなかった本書について、まず全体像を見ていく。そして、品詞分類とその下位分類、さらにはこれらの範疇にどのような語が入るのかを手がかりとして、本書の記述と日本で出版された文法著作である大槻文彦 1902『日本文法中教科書』^[2]の記述、さらに必要に応じて龔千炎 1997 が「初期白話文法群」の一つ黎錦熙 1924『新著国語文法』が参照したとしている英語を記述したネスフィールド『子スフィールド氏英文典講義録』^[3]の記述とを比較対照し、本書の特徴について考察し、陳浚介が日本語学の研究成果を取り入れたのか否かを考察し、さらに本書についての評価をしたい。

1. 陳浚介と『白話文文法綱要』について

陳浚介生卒年不明。陳浚介について論じている先行研究は管見の限りにおいて見当たらない。各種人物辞典を見ても陳浚介に関する記述は見られない。陳浚介は本書序において「この書は江蘇省立第一師範附属小学校で白話文を教えた際に文法を研究した時の原稿で、本来は出版するようなものではなかった。」（陳浚介 1920：序 1-2）と述べている。また陳浚介は雑誌『教育与職業』1921 年第 9 期 12-15 頁に「学制系統草案關於職業教育的我見」という論考を発表しているが、この論考での所属は「蘇一師小」と書かれている。陳浚介は江蘇省立第一師範附属小学校の教員だったようだ。北京師範大学図書館「晚清民国教材全文庫」を検索すると陳浚介は呉研因^[4]らとともに『新法歴史教授書』という指導書を書いていることが分かる^[5]。

次に本書について概説する。本書の大きさは縦 190mm、横 130mm、厚さ 4mm である。図 1 は筆者が所有する本書の書影である。序 2 頁、目次 2 頁、本文 73 頁、このほかに商務印書館で出版された書籍等の宣伝と奥付が 3 頁分あり、合計すると 80

図 1 筆者蔵『白話文文法綱要』



頁となる。「初期白話文法群」の著作で蔡曉舟1920『国語組織法』は全101頁、李直1920『語体文法』は全91頁あり、「初期白話文法群」の中ではどちらかという薄いと見えよう。

2. 本書の内容について

それでは本書の内容を概観する。

本書は全16章からなる。第1章から第9章までは品詞について、第10章から第15章までは文の構造について、第16章は句読点などの文章の補助記号について記述している。

第1章（1-2頁）では文字と品詞の違いについて述べている。語のもつ意味や性質から「名物詞」「称代詞」「区別詞」「動詞」「疏状詞」「助詞」「接続詞」「感発詞」の8種類に品詞を分けるとしている。

第2章（2-9頁）は「名物詞」について論じている。この「名物詞」は名詞である。「名物詞」を「固有の名物詞」、「普通の名物詞」、「代用の名物詞」の3種類に分類をしている。「固有の名物詞」は固有名詞のことである。陳浚介は固有名詞を「人名」「地名」「宗教名」など12種類に分類をしている。このうち「地名」は「国名」「山名」など全部で18種類に分類をしている。「普通の名物詞」は「具体的な名物詞」と「抽象的な名物詞」に分けている。「代用の名物詞」は代名詞ではなく「代名詞が名物詞として用いられているもの」「区別詞が名物詞として用いられているもの」などで、他の品詞のものが「名物詞」として使用されるものを指す。次に、陳浚介は名詞が複数を表す形式について述べている。複数を表す名詞の形式として、「毎年」（毎年）^[6]“各處”（各地）の“每”“各”のように「名物詞に区別詞を加えたもの」、「名物詞の前に“甚麼”（何）を加えたもの」など5つの形式で複数を表すと述べている。次に陳浚介は名詞の性について述べ、最後に名詞の「格」について述べている。

第3章（9-16頁）では「称代詞」について論じている。この「称代詞」は代詞^[7]である。陳浚介はこの代詞を「人称代詞」、「指示称代詞」、「疑問称代詞」の3種類に分類している。「人称代詞」は人称代詞で一人称、二人称、三人称と分け、それぞれを“我”（私）“你”（あなた）“他”（彼）のような「単純」、「我自己」（私自身）“你自己”（あなた自身）“他自己”（彼自身）のような「複合」、「本縣長」（本県知事）“尊府”（お宅）“先生”（男性に対する尊称）のような「特用」の3種類に分けている。「指示称代詞」は指示代詞のことで、“這”（これ）“那些個”（あれら）といった「もの」、「這裏」（ここ）“那個地方”（あの場所）のような「場所」、「這邊」（こちら）“那塊兒”（あちら）といった「方向」、「此時」（この時）“那個時候”（あのとき）のような「時」の4種類に分類し、それぞれを近称と遠称に分類している。「疑問称代詞」は疑問代詞のことで、“誰”（誰）のような「人について用いるもの」、「那」（どれ）^[8]のような「ものについて用いるもの」、

“那兒”（どこ）のような「場所について用いるもの」、「那邊」（どちら）のような「方向について用いるもの」、「那個時候」（どのとき）のような「時について用いるもの」、「幾個」（いくつ）のような「数について用いるもの」、「怎樣」（どのよう）のような「状態について用いるもの」の7種類に分類している。最後に陳浚介は代詞の格について述べている。

第4章（16-22頁）では「区別詞」について論じている。この「区別詞」は形容詞のことである。陳浚介は「区別詞」の種類として、「数量区別詞」「性状区別詞」「指示区別詞」「個別区別詞」「代用区別詞」の5種類に分類している。「数量形容詞」は数や数に関する表現で、“一”（一）“第一”（一番目）“頭等”（一等）“二分之一”（2分の1）のような確定した数と“大家”（みんな）“許多”（多くの）“一切”（一切の）“幾”（いくつ）のような不確定のものがあるとしている。「性状形容詞」は“勇敢”（勇敢な），“大”（大きい）のような性質を表す「区別詞」を指す。「指示区別詞」は“這麼”（このような）“那樣”（あのような）のように「名物詞」と共に使う「区別詞」を指す。「個別区別詞」は“每”“各”の2種類である。「代用区別詞」は“中國的語言”（中国の言語）の“中國”のように「名物詞」や「動詞」などが「区別詞」として使われるものを指す。次に陳浚介は「区別詞」の用法について「名物詞」の前で使われるものと「名物詞」の後で使われるものの2種類に分けて述べている。最後に陳浚介は「変態」といって、“冷的我不要吃。”（冷たいのは私はいりません。）“田裏的麥都黃了。”（畑の麦が黄色く色づいた。）の“冷的”“黃了”のように「区別詞」が「名物詞」や「動詞」として用いられる例について述べている。

第5章（22-34頁）では「動詞」について論じている。陳浚介は動詞を「自動詞」「他動詞」「助動詞」の3種類に分けている。陳浚介は「助動詞」をさらに「可能的助動詞」などの6種類に分類している。次に陳浚介は動詞の用法について“是”（である）“讀”（読む）のような「単独での用法」、「想想」（ちょっと考える），“看看”（ちょっと見る）のような「動詞を重ねる用法」、「把」「給」といった「助詞」を伴った「動詞に助詞を加えたもの」、「動詞に助動詞を加えたもの^[9]」の4種類に分けている。次に陳浚介は「動詞と時間の関係」と題して、「現在形」「過去形」「未来形」という動詞の時制について述べている。最後に陳浚介は「区別詞」で述べたように動詞にも“這個人是昨天來的。”（この人は昨日来た人です。）のような「変態」があるとし、「動詞」が「名物詞」として用いられる例と「区別詞」として用いられる例を挙げている。

第6章（34-45頁）では「疏状詞」について論じている。「疏状詞」は基本的には副詞であるが、“今天”（今日）“前邊”（前）など名詞や場所詞なども含まれる。陳浚介は「疏状詞」を“從前”（これまで）“就”（すぐに）のような「時間に関するもの」、「裏邊」（中で）“中間”（間で）のような「場所に関するもの」、「初次」（はじめて）“再”（再び）のような「数に関するもの」、「很」（とても）“太”（あまりにも）などの「量

や程度に関するもの」、「恐怕」（おそらく）“一定”（必ず）のような「状態や事柄に関するもの」、「是的」（その通りだ）“不”（～ではない）のような「諾否に関するもの」の6種類を「普通の疏状詞」とし、「極了」（極めて）“得了不得”（とても）などの動詞の後ろで程度補語として使われるこれらの語を「特別の疏状詞」とし、さらに「疑問の疏状詞」の3種類に分類している。

第7章（45-50頁）は「助詞」について論じている。陳浚介は「助詞」を現代の介詞^[10]に当たる「前置助詞」、文末におかれる「文末助詞」、「一般助詞」“的”の3種類に分類している。「前置助詞」については「場所を表すもの」、「時間を表すもの」、「そのほか」の3種類に分類している。また、「前置助詞」の目的語となる語句についても述べている。

第8章（50-52頁）は「接続詞」について論じている。「接続詞」は接続詞のことである。これまで見てきた品詞は意味や機能で下位分類をしていたが、「接続詞」については“因爲”（～なので）“除非”（～しない限り）のような「単独で使われるもの」と、“不但……而且”（……なばかりでなく）“因爲……所以”（……なので）のように「連用して使われるもの」の2種類に分けている。

第9章（52-56頁）は「感発詞」について論じている。「感発詞」は感嘆詞のことである。陳浚介は「感発詞」を“嚇啦”の「喜びを表す」、「哈哈」の「楽しみを表す」、「噲」などの「呼びかけを表す」、「喏」などの「承諾を表す」、「啊呀」などの「驚きを表す」、「噯呀」などの「憂慮を表す」、「唉」などの「疑問を表す」、「啊」などの「疑問の解決後に用いる」、「嘎唷」の「疲労を表す」、「呸」の「憎悪を表す」、「嘿」の「叱責を表す」、「哼」の「軽蔑を表す」、「啞啞」などの「音を表す」の13種類に分類している。

第10章（56-57頁）は単文の構造について論じている。陳浚介は文を構成する要素は、「句主」（主語）、「区別属詞」（連体修飾語）、「謂語」（述語）、「疏状属詞」（連用修飾語）の4つからなるが、この中で「句主」と「謂語」がなければ文が成り立たないと述べている。

第11章（57-58頁）は「句主」と「区別属詞」の構成要素について論じている。「句主」となる語句は「名物詞」もしくは「名物詞」の性質を持った語である必要があり、「名物詞」「称代詞」「名物詞の性質を持つ動詞」「句」が「句主」となるとしている。「区別属詞」は種類が多いが、「区別属詞」として使用される語句は「区別詞」の性質を持つ必要があるとし、「区別詞」「区別詞の性質を持った動詞」「主物格の名物詞もしくは称代詞」「名物詞が形容詞として用いられるもの」「名物詞の並列」「疏状詞が区別詞として用いられるもの」の6種類があるとしている。

第12章（58-60頁）は「謂語」と「疏状属詞」の構成要素について論じている。「謂語」となる語は必ず動詞だと述べている。「疏状属詞」は時間、方法、場所、原因、方法、目的等の動作の様相を表し、「疏状属詞」となる語句は「疏状詞」の性質を持つ必要

があるとしている。そして、この「疏状属詞」となることのできる語句として、「疏状詞」「疏状詞の性質を持った語」「区別詞」「区別詞の性質を持った動詞」「疏状受事」「前置助詞と受事」の6種類があるとしている。

第13章(60-63頁)は複文の構成について論じている。複文をその構造から「並列の複文」と「主従の複文」の2種類に分類している。

第14章(63-65頁)は文の分析について論じている。陳浚介は“那兇的老虎今天射死了。”(あの凶暴な虎は今日射殺された。)
“馬其頓王, 亞歷山德, 戰勝了波斯以後, 叫大亞歷山德。”(マケドニア王、アレキサンダーはペルシャに勝って以降、アレキサンダー大王と呼ばれた。いずれも陳浚介1920:63)といった例を挙げ、それぞれの語句がどのような文成分として使用されているか図を使用し論じている。図2はその例である。

図2 文の分析(陳浚介1920:63)

句 主	區別屬詞	謂 語			疏 状 屬 詞
		主要動詞	受 事	補 足 語	
一、老虎	那 兇 的	射死了			今 天
二、 <u>亞歷山德</u>	<u>馬其頓王</u>	叫		<u>大亞歷山德</u>	戰勝了 <u>波斯</u> 以後
三、他們		看見	這疲乏的人	睡 熟 了	剛 纔
四、父親	我的	教	(1)他的兒子 (2)藥曲		很 有 進 步

第15章(60-67頁)は文の種類について論じている。陳浚介は文には「陳述文」「疑問文」「命令文」「感嘆文」の4種類があるとしている。

第16章(67-73頁)は句読点などの文章の補助記号について論じている。句読点に括弧など11種類の補助記号の使用法について述べている。

以上が本書の全16章のおおまかな内容である。それでは本書の品詞やその下位分類についてどのような特徴があるのであろうか。

3. 品詞とその下位分類とその範疇に入る語の記述について

陳浚介は品詞やその下位分類、またその範疇に入る語の記述についてどのような特徴があるのであろうか。本書と「初期白話文法群」、大槻文彦、ネスフィールドらの著作と適宜対照しながら考察を行いたい。

3.1. 品詞とその名について

まず品詞とその名称について考えたい。陳浚介は品詞を「名物詞」「称代詞」「区別

詞」「動詞」「疏状詞」「助詞」「接続詞」「感発詞」の8種類に分けるとしている。「初期白話文法群」の蔡曉舟1920では品詞を「名詞」「代名詞」「動詞」「形容詞」「副加詞」「媒介詞」「承接詞」「語前補助詞」「語後補助詞」の9種類としている。また「初期白話文法群」の馬繼楨1920では「名詞」「代名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」「介詞」「接続詞」「助詞」「感嘆詞」の9種類に分類をしている。馬繼楨の分類は文言を対象とした1912年に出版された戴克敦の『国文典』とほぼ同じ分類である。田村2009は蔡曉舟の分類と馬繼楨の品詞の分類の差について「実際には大きくない」（田村2009：3）と指摘している。

次に日本語や英語の品詞分類を見よう。大槻文彦は「名詞」「動詞」「形容詞」「助動詞」「副詞」「接続詞」「亘爾乎波」「感動詞」の8種類に分類している。ネスフィールドは「名詞」「代名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」「前置詞」「接続詞」「感嘆詞」の8種類に分類している。品詞の数で言えば陳浚介は大槻文彦とも、また、ネスフィールドとも同じ数ではある。品詞の名称については若干の異同はあるが大差は無いと言えよう。しかしながら、陳浚介のいう「助詞」はネスフィールドには存在しない品詞であり、大槻文彦の「亘爾乎波」とも異なる。この点については後節で述べることとする。

3.2. 名詞について

次に名詞について見る。陳浚介は名詞を「固有」（陳浚介1920：2）、「普通」（陳浚介1920：5）、「代用」（陳浚介1920：6）の3種類に分類をしている。陳浚介は固有名詞について非常に詳細な分類を行っている。固有名詞を意味の上で12種類に分類し、固有名詞の一つ「地名」についてはさらに18に分けている。同じ固有名詞であっても、「人名」などは実線を、「地名」は二重の実線を、「書名」には波線をというように固有名詞の性質によって使用する補助記号が異なる。このことを説明する為に陳浚介は固有名詞を細かく分けたのではないだろうか。陳浚介は「普通」については「具体的」（陳浚介1920：5）と「抽象的」（陳浚介1920：6）の2種類に分けている。

大槻文彦は名詞を「固有」「普通」（大槻1902：7）に分けている。さらに、名詞の下位分類に「代名詞」（大槻1902：9）と「数詞」（大槻1902：13）を立てている。

ネスフィールドは名詞を「抽象名詞」と「具体名詞」に分類し、「具体名詞」をさらに「固有名詞」「普通名詞」「集合名詞」「物質名詞」に分類している（Nesfield1895：12）。

名詞について見てきたが、陳浚介は大槻文彦やネスフィールドと異なり、名詞とりわけ固有名詞については非常に詳細に分けていた。これは文章記号との関連が考えられる。本書は学校現場で使用される文法書であるが、名詞に関して言えば、文法的に名詞を考察したというよりは、正しく文を書くためという教育上の目的を念頭に置いた結果ではないだろうか。

3.3. 代名詞について

代名詞について見る。陳浚介は代名詞を「称代詞」と呼び、人に対して使用する「人称代詞」、ものをさすのに使う「指示称代詞」、疑問詞である「疑問称代詞」の3種類に分類している。

「人称代詞」で特徴的なのは一人称と二人称について「特用」という特殊な「人称代詞」を挙げている点である。前節で紹介した“本縣長”（本県知事）“本廳長”（本庁長 いずれも陳浚介 1920：10）という“本”は「官吏用語である」（陳浚介 1920：10）と述べている。このほかに“敝”“小”“家”“舍”“草”“賤”（いずれも陳浚介 1920：10）という字を使用した熟語は一人称を表す特別な「人称代詞」としている。そして、陳浚介はこれらのものを「謙称語」と名付けている。また、二人称を表す特別な「人称代詞」として、“尊”“令”“貴”“台”（以上は陳浚介 1920:11）“高”“大”“老”（以上は陳浚介 1920:12）という字を使用した熟語、更には“閣下”（閣下）“寶號”（貴店）“吾兄”（貴兄 いずれも陳浚介 1920:12）を特別な二人称の「人称代詞」とし、「尊称語」と名付けている。さらに、陳浚介は二人称の特別なものに“夥計”（店員さん）“堂官”（ご婦人）“苦力”（人夫さん いずれも陳浚介 1920:12）という語を挙げ、「働く人に対する敬称」（陳浚介 1920：12）と説明している。日本語の丁寧語を意識していたか否かは不明ではあるが、陳浚介の書きぶりを見ると日本語の尊敬、謙讓、丁寧という敬語の概念に非常に近いように思われる。

大槻文彦は前節でも触れたが代名詞を名詞や動詞と同じレベルの品詞とは考えていない。代名詞は「代名詞といひ、名詞の一種なり。」（大槻 1902：9）と述べ名詞の一つとしている。そして代名詞には人称代名詞の「人代名詞」（大槻 1902：9）と「指示代名詞」（大槻 1920：10）の2種類があるとしている。疑問代名詞は人称代名詞と指示代名詞の「不定称」に位置づけており、代名詞の下位分類にはしていない。

ネスフィールドは代名詞を「人称代名詞」、「指示代名詞」、「関係代名詞」、「疑問代名詞」（Nesfield 1895：39）の四種類に分けている。

代名詞についてみると、品詞分類という点では陳浚介と大槻文彦は異なっている。陳浚介は関係代名詞を除けばネスフィールドの分類と同じだと言える。陳浚介の分類に関係代名詞がないのは、関係代名詞が中国語には存在しないためであり、陳浚介が中国語の特徴を考えた上でネスフィールドの代名詞の下位分類を利用したのであろう。さらに、陳浚介は「人称代詞」の中に日本語の敬語のような概念を考えていた。このような日本語の敬語の概念を記述したのは「初期白話文法群」の中では陳浚介が初めである。この点は本書の大きな特徴の一つと言えよう。

3.4. 形容詞について

陳浚介は形容詞を「区別詞」と名付けている。この「区別詞」の下位分類として

「数量区別詞」（陳浚介 1920：16）、「性状区別詞」（陳浚介 1920：18）、「指示区別詞」、「個別区別詞」、「代用区別詞」（いずれも陳浚介 1920：19）という5つを立てている。陳浚介は「数量区別詞」のなかで「本数^[11]」の区別詞を使用する際、数字の下に陪伴字一字を伴う。種類が非常に多いが、簡単に言うと、2種類に分けられる。」（陳浚介 1920：18）と述べている。2種類というのは“個”を使うものと、それ以外という分け方である。これは量詞について述べており、「初期白話文法群」のなかで量詞について言及した初めての記述である。

大槻文彦は形容詞について「形容詞は物事の状態、性質、情意等を形容していふ語なり。」（大槻 1902：35）と述べている。大槻文彦は形容詞の意味や機能によって下位分類を立てず、形容詞の活用によって「久志幾活用」と「志久志志幾活用」（いずれも大槻 1902：36）の2種類があるとしている。つまり、ク活用とシク活用があるとしているのである。

ネスフィールドは形容詞を「固有形容詞」、「叙述形容詞」、「量形容詞」、「数形容詞」、「指示形容詞」、「配分形容詞」（Nesfield 1895：81）の6種類に分けている。

形容詞について見てきたが、形容詞の下位分類という点では陳浚介はネスフィールドの分類法を利用したと言えるであろう。しかしながら、中国語の特徴の一つと言える量詞について記述しており、英語の分類法を利用しつつも、中国語の特性について考察を行っていたことが窺える。

3.5. 動詞について

陳浚介は動詞を「自動詞」、「他動詞」、「助動詞」の3種類に分けている。助動詞についてはさらに“能”“會”などの「可能的助動詞」、「要’想’などの「希望の助動詞」（以上は陳浚介 1920:26）、「得’肯’などの「指定の助動詞」（陳浚介 1920:27）、「教’使’などの「使役の助動詞」（陳浚介 1920:28）、「不’沒’などの「否定の助動詞」、「被’教’などの「受身の助動詞」（いずれも陳浚介 1920：29）のように分類している。田村 2009 によれば「初期白話文法群」においてどのような語を助動詞とするかについては「著作毎の異同が大きい」（田村 2009：15）と述べている。特に否定を助動詞とするのは陳浚介の他に馬繼楨のみと指摘している（田村 2009：14）。

大槻文彦は動詞について動作の対象となるものにより自動詞と他動詞に分けている。助動詞は動詞の下位分類ではなく独立した品詞となっている。そして助動詞の意味から「所相の助動詞」（大槻 1902：45）、「勢相の助動詞」（大槻 1902:46）、「使役相の助動詞」（大槻 1902:47）、「指定の助動詞」（大槻 1902：48）、「打消の助動詞」（大槻 1902：49）、「過去の助動詞」（大槻 1902：50）、「未来の助動詞」（大槻 1902：51）、「推量の助動詞」（大槻 1902:52）、「詠嘆の助動詞」、「比況の助動詞」（いずれも大槻 1902：53）の10種類に分けている。

ネスフィールドは動詞を他動詞、自動詞、助動詞の3種類に分類している(Nesfield1895:51)。助動詞については陳浚介や大槻文彦のように細かい分類を行っていない。

動詞についてみてきたが、動詞を自動詞と他動詞にまず分ける点は陳浚介、大槻文彦、ネスフィールドで共通していた。助動詞については大槻文彦のみ独立した品詞とし、その範疇を非常に細かく分けて記述している。ネスフィールドは助動詞について詳細な分類を行っていない。このように見ると、陳浚介はどちらかというが大槻文彦の助動詞に近い考え方をしていたと言えよう。「初期白話文法群」の助動詞には否定をその範疇に含まないのが多数派ではあるが、陳浚介は否定を助動詞としていた。このような点も陳浚介と大槻文彦とで共通している。一方で、大槻文彦は「過去の助動詞」「未来の助動詞」といった時制を助動詞の範疇としている。陳浚介は時制を助動詞としていない。陳浚介は「動詞」のなかで現在形について「動詞のあとに“着”がつく」(陳浚介 1920:32)、過去形は「動詞のあとに“了”がつく」、さらに、「動詞のあとに“過”がつく」、また、「動詞のあとに“着了”がつく」(いずれも陳浚介 1920:32)と述べ、未来形は「動詞の前に“要”がつく」(陳浚介 1920:33)と述べている。“要”は「希望の助動詞」に、“着”“了”などについては言及されていないが、助動詞とは考えなかったようだ。それはこれらの語がいずれも動詞の後ろが定位であるからだろうと思われる。陳浚介は日本語の助動詞の分類法を、中国語の特徴を考慮した上で使用したのではないだろうか。

3.6. 副詞について

陳浚介は副詞を「疏状詞」と呼んでいる。そして、この「疏状詞」を「普通」「特別」「疑問」の3種類に分類している。「普通の疏状詞」はさらに「時間に関するもの」(陳浚介 1920:35)、「場所に関するもの」(陳浚介 1920:36)、「数に関するもの」(陳浚介 1920:38)、「量や程度に関するもの」(陳浚介 1920:39)、「状態や事柄に関するもの」(陳浚介 1920:40)、「諾否に関するもの」(陳浚介 1920:42)の6種類に分けている。「特別な疏状詞」は「極了」(極めて)“得很”(とても)“得多”(多く)いずれも陳浚介 1920:43)といった程度補語として使われるものの事である。「疑問の疏状詞」は動作などの時間や数量回数などを尋ねるものである。

大槻文彦は副詞について「動詞に副ひ、或は、形容詞、又は、他の副詞にも副ひて、その意味を種種に修飾する語なり。」(大槻 1902:66)と定義している。副詞そのものを意味の上で分類はしていない。その上で名詞が副詞として使われる例、形容詞が副詞として使われる例など、どのような語が副詞として使われるか述べている。また、副詞を構成する接頭語や接尾語(大槻 1902:70)について述べている。

ネスフィールドは副詞を「単用」、「疑問」、「関係」(Nesfield1895:94)の3種類

に分けている。単用副詞はさらに「時」、「場所」（いずれも Nesfield1895：94）、「数」「仕方、性質若しくは状態」、「量、範囲若しくは度」「肯定若しくは否定」（いずれも Nesfield1895：95）の6種類に分けている。疑問副詞も同様に「時」、「場所」、「数」、「仕方、性質、若しくは状態」、「量若しくは度」、「原因若しくは理由」（いずれも Nesfield1895：95）の6種類に分類している。

副詞について見てきたが、陳浚介の副詞の分類法は代名詞と同様にネスフィールドと近いように思われる。しかしながら、中国語の特徴をふまえた上で、関係代名詞を除外したように、関係副詞をも除外したようだ。

3.7. 助詞について

陳浚介は助詞を「前置助詞」（陳浚介 1920：45）、「句末助詞」（陳浚介 1920：48）、「一般助詞」（陳浚介 1920：49）の3種類に分類している。新島淳良 1969によれば中国語学では助詞を時態助詞、構造助詞、語気助詞の3種類に分類する。陳浚介の分類法とは異なるのである。陳浚介は助詞を3種類に分類したが、「用法は非常に繁雑で、ここではそれぞれの分類に属する語を挙げるのみとする」（陳浚介 1920：45）と述べ、どのようなものを助詞としたか定義していない。陳浚介の「前置助詞」は現代の介詞、英語では前置詞に当たるものである。陳浚介は「前置助詞」をさらに「場所を表すもの」（陳浚介 1920：45）、「時間を表すもの」（陳浚介 1920：46）、「そのほか」（陳浚介 1920：3）の3種類に分類している。「句末助詞」は“了”“的”（いずれも陳浚介 1920：48）といった文末におかれる助詞で、現代の語気助詞である。「一般助詞」は“的”で構造助詞である^[12]。

大槻文彦は助詞を「亘爾乎波」と呼んでいる。そして「亘爾乎波」がどのような語につくかで「名詞にのみ属く亘爾乎波」（大槻 1902:78）、「種類の語に属く亘爾乎波」（大槻 1902：84）、「動詞にのみ属く亘爾乎波」（大槻 1902：89）の3種類に分類している。

ネスフィールドは前置詞についてその目的語の性質から「詞副（ママ）を目的語とす」（Nesfield1895：100）、「語句を目的語とす」、「名章句を目的語とす」（いずれも Nesfield1895：101）の3種類に分けている。

助詞について見てきた。陳浚介の分類は大槻文彦の「亘爾乎波」ともネスフィールドの前置詞とも異なるものであった。陳浚介自身が助詞について明確な定義を与えていないが、単独では使用する事のできない語を助詞と考えたのであれば、陳浚介の分類のようになると思われる。このように考えると、陳浚介は独自の視点で「助詞」というものを考えたのだと言えよう。

3.8. 接続詞について

陳浚介は接続詞を「連接詞」と呼んでいる。この「連接詞」をその用法から“因爲”

など「単独で使われるもの」(陳浚介 1920:50) 16 語と“不但……而且”のように「連用して使われるもの」(陳浚介 1920:52) 5 種をその例として挙げている。

大槻文彦は接続詞について「並びたる同種の文、又は、句の間に入りて、上下を続ぎ合はする語なり」(大槻 1902:76) と述べている。ただし、「山又山を越ゆ 書を読み、且、字を習ふ」(大槻 1902:76) という例文を挙げるのみで、他の接続詞については触れていない。

ネスフィールドは接続詞について文と文の意味関係から「同位接続詞」「従位接続詞」(Nesfield1895:104) の 2 種類に分類している。ネスフィールドは「同位接続詞」をさらに“And”などの「聚積接続詞」(Nesfield1895:104)、“Either…or…”などの「取捨接続詞」、「But」などの「反対接続詞」、「Therefore」などの「推度接続詞」(以上は Nesfield1895:105) という下位分類を立てている。そして「従位接続詞」については「同格」「原因」「結果」「目的」「条件」(以上 Nesfield1895:106)「讓歩若しくは反対」「比較」「範囲若しくは方法」(以上 Nesfield1895:107)「時」(Nesfield1895:108) の 9 種類の下位分類を立て例文を上げ説明している。

接続詞について見てきたが、陳浚介は文と文の関係ではなく、単独で使用するのか連用して使用するのかという点で接続詞について考えた。ネスフィールドのように意味関係については論じていない。大槻文彦ともネスフィールドとも異なる視点で接続詞を考えたようである。

3.9. 感嘆詞について

陳浚介は感嘆詞を感発詞と呼び、「喜びを表す」(陳浚介 1920:52)、「楽しみを表す」、「呼びかけを表す」、「承諾を表す」、「驚きを表す」(以上陳浚介 1920:53)、「憂慮を表す」、「疑問を表す」、「疑問の解決後に用いる」、「疲労を表す」(以上陳浚介 1920:54)、「憎悪を表す」、「叱責を表す」、「軽蔑を表す」、「音を表す」(以上陳浚介 1920:53) の 13 種類に分類している。

大槻文彦は感嘆詞を「感動詞」と呼んでいる。使用される場所で「他語の上に用ゐるもの」(大槻 1902:98)、「他語の中間、又は、下に用ゐるもの」(大槻 1902:99)、「他語の下に用ゐるもの」(大槻 1902:100) の 3 種類に分類している。

ネスフィールドは「間投詞」と呼び、表す意味から「喜悅」、「悲歎」、「快樂」、「賞讚」、「疲労」、「注意」、「非難」、「輕侮」、「嘲弄」、「疑惑」(いずれも Nesfield1895:110) の 10 種類に分類している。

感嘆詞についていうと、陳浚介はネスフィールドのようにどのような意味を表すかで分類を行った。

4. まとめ

本稿では陳浚介『白話文法綱要』について、本書の内容を紹介し、品詞分類とその下位分類、さらにはこれらの範疇にどのような語が入るのかを手がかりとして、本書の特徴について考察を行った。

品詞分類という大きな枠組みは、陳浚介、大槻文彦、ネスフィールドの三者で名称の異同はあるが、ほぼ同じであった。しかし、品詞の下位分類を見ると、本書には「人称代詞」で敬語に近い概念があること、助動詞の分類法に日本語学の成果を取り入れた痕跡があり、陳浚介は日本語学の成果を取り入れたように思われる。また、陳浚介は代名詞や形容詞さらに副詞の下位分類では英語の分類法を利用したように思われる。しかしながら、陳浚介は日本語や英語の研究成果を中国語の文法事項に無理やり当てはめるのではなく、陳浚介自身で中国語に対して考察を行った上でこれらの成果を利用していた。

先行研究において、陳浚介『白話文法綱要』はほとんど取り上げられてこなかった。「初期白話文法群」の中ではどちらかといえば分量の少ない本ではある。しかし、その記述には中国語の特徴を捉えたものが多い。

以上の結果から本稿では本書を「初期白話文法群」の中でも当時の研究水準を知る重要な文法書と評価する。

注

- [1] 本稿の中華民国（以下民国と略称する）は中国本土に1912年から中華人民共和国が成立する1949年までを指す。
- [2] 大槻文彦には多くの文法著作がある。本稿では陳浚介が小学校の教員だったことから学校現場で使用されるべく書かれた大槻文彦1902を利用することとした。
- [3] 原題はNesfield's English Grammar Serier. この書は全4冊からなるシリーズ本である。本稿ではBook IVを引用する。なお、本稿での邦題は奈倉次郎講述1900『子スフィールド氏第三英文典講義録』。上原書店蔵版の題名による。この本はBook IIIの邦訳であるが、Book IVはBook IIIよりさらに記述が詳細になったという違いのみである。このため、本稿のネスフィールドの引用はこの邦訳本を引いた。
- [4] 呉研因。1886年江蘇省江陰に生まれる。教育家で特に小学校語文（国語）教育に従事した。1975年没。
- [5] http://jiaocai.bnu.edu.cn/index.php?m=content&c=lists&a=grouplists&to_object=13708&bsd_dutyer=11669 最終アクセス日2022年8月10日
- [6] 本書の語や文を引用する際の邦訳は本稿執筆による。
- [7] 中国語学では代名詞のことを代詞と呼んでいる。
- [8] 現代中国語では“那”（あれ）と“哪”（どれ）を区別しているが、民国初期は区別をせず、いずれも“那”を使用することが多い。

- [9] ここでは“你會說英語嗎？”(あなたは英語が話せますか。 陳浚介 1920:26)のような文ではなく、“讀不讀”(読むか読まないか)“來不來”(来るか来ないか いずれも陳浚介 1920:31)のような反復疑問文の形式を例として挙げている。
- [10] 中国語学では前置詞をさすものである。
- [11] 筆者注“一”“百”といった数を表す。
- [12] 構造助詞は“的”“地”“得”の3種類である。しかし陳浚介が例として挙げた9例は全て“的”であり“地”“得”については例が挙げられていない。しかし、7つ目の例文“你看的明白嗎？”(あなたは見て理解できますか。 陳浚介 1920:50)の解説に「動詞が疏状詞として用いられたもので、“得”と同じである」(陳浚介 1920:50)とある。しかし、連用修飾語を作る“地”についてはその例を挙げていない。

参考文献

- 奈倉次郎 1900. 『子スフィールド氏第三英文典講義録』。東京：上原書店蔵版
- 新島淳良 1969. 「助詞」, 中国語学研究会『中国語学新辞典』52-54 頁, 東京：光生館。
- 大槻文彦 1902. 『日本文法中教科書』。東京・大阪：開成館蔵版。
- 田村新 2009. 「1920年代前半における中国語白話文法研究について」, 首都大学東京都市教養学部人文・社会系『人文学報』418:1-18 頁。
- 田村新 2015. 「清末民初の中国語文言文研究における品詞分類について」, 首都大学東京都市教養学部人文・社会系『人文学報』508:11-28 頁。
- 蔡曉舟 1920. 《國語組織法》。上海：泰東圖書局。
- 陳浚介 1920. 《白話文法綱要》。上海：商務印書館。
- 陳浚介 1921. 《學制系統草案關於職業教育的我見》, 《教育與職業》第9期 12-15 頁。
- 戴克敦 1912. 《國文典》。上海：商務印書局。
- 龚千炎 1997. 《中国语法学史》(修订本)。北京：语文出版社。
- 李直 1920. 《語體文法》。上海：中華書局。
- 馬繼楨 1920. 《國語典》。上海：泰東圖書局。
- J.C. Nesfield 1895. *Idiom, Grammar, And Synthesis for High Schools*. London: Macmillan and co.